

10月23日(金)

サンクト・ペテルブルグを後にし、プルコヴォ空港からフランクフルトに飛び立ちました。なお、高野議員は、所用のためヘルシンキ経由で帰阪しました。

フランクフルト

ルフトハンザ社訪問 エアポートプロモーション



フランクフルトに到着し、ルフトハンザドイツ航空フランクフルト本社を訪問しました。社屋を見学した後、ロランド・ブッシュ旅客部門取締役・財務・人事担当上級副社長と面談しました。

まず、北山副市長が、ルフトハンザドイツ航空が40年という長きにわたり大阪に就航していることに謝意を述べ、続いて、次のように今回の訪問の目的を説明しました。

- ・関西国際空港全体構想促進協議会を代表して訪問させていただいた。

- ・訪問理由は、フランクフルト—関空の現行便の継続と将来的な増便の要望である。
- ・日本の地方分権の流れの中で、今後、関西地方の役割は高まるものと思われる。
- ・関西はGDPがカナダ一国に匹敵し、歴史的、文化的にも日本の中で重要な地域であることから、経済、文化・観光の分野における交流が期待できる。
- ・北ヤードの開発も順調に進んでおり、さらなる国際的な発展が期待できる。
- ・本日は、関西国際空港株式会社からインセンティブについて説明があるので、ぜひ前向きにご検討いただきたい。

続いて、舟戸議長が、「関空—フランクフルト便の就航のお礼に大阪市民の代表として訪問した。大阪人は、観光客をあたたくもてなすことのできるホスピタリティにあふれている。今後、ドイツとの文化交流、経済交流がさらに活発になることを期待しており、お互いに協力していきたい。」旨のあいさつをしました。

次に、重枝在フランクフルト日本国総領事のあいさつの後、櫻内関西経済連合会理事が、次のように関西とドイツの経済関係を中心に説明されました。

- ・関西とドイツの交易は、EU諸国の中で最も高い貿易率である。
- ・関西からドイツへの輸出は液晶テレビ・DVDレコーダーなどの電化製品が33%を占めるのに対し、ドイツから関西への輸出は医薬品などの化学製品が40%を占めている。
- ・関西にはバイエルン薬品などドイツ企業が40社進出している。
- ・現在、大阪湾岸地域にはパナソニック、シャープなどの液晶ディスプレイの工場が次々とできている。
- ・2012年には、関西からEUに対する輸出額は現在比20%増になると見込まれており、関西空港の需要もますます高まるものと期待している。

- ・8月には関西に対する投資相談窓口となるインベスト関西もオープンしたので、ぜひご利用いただきたい。また、大阪市でも進出企業に対するさまざまなインセンティブを設けているので活用していただきたい。

続いて、竹内関西国際空港株式会社代表取締役副社長が、次のようにプロモーションをしました。

- ・40年間安定的な路線運行を続けていただいていること及びルフトハンザ日本本社・関西本社による多大なるご協力に対してお礼申し上げます。
- ・今回のフライトで4月からルフトハンザが再開したファーストクラスを利用して大変よかった。ファーストクラス、ビジネスクラスの利用が収支の改善につながることを期待する。
- ・現在就航している路線の維持と、近い将来、景気が向上することを期待して機材の大型化と増便をお願いしたい。そのために思い切ったインセンティブを2つ用意している。
- ・今のような厳しい状況のときこそ、良好な関係を保ちたいと思っている。このインセンティブを機会にぜひ増便を検討していただきたい。

次に、大阪側のプロモーションに対する答礼として、ブッシュ上級副社長が次のように発言されました。

- ・関空副社長をはじめとした一行の本日の来訪に対してお礼申し上げます。
- ・フランクフルト空港では、1日約2,000便のルフトハンザ機が発着している。
- ・大阪からヨーロッパへの航空マーケットでは14%をルフトハンザが占めており、ドイツのハイクオリティが認められている証明と考えている。
- ・今後の関西の力を信じ、ルフトハンザ本社の心意気として皆さんと協力していきたい。



ブッシュ上級副社長（中央）

以上でエアポートプロモーションを終え、フランクフルト空港からルフトハンザ航空の便でハンブルクへ向かいました。

ハンブルク市

夜、ハンブルク空港に到着すると、ハンブルク市職員の方々が出迎えてくれました。

10月24日(土)

ハンブルク市街

午前中はハンブルク市街を視察しました。ハンブルク市は、ドイツの北部、エルベ川の河口から120キロメートル上流に位置し、アルスター湖畔の緑豊かな美しい大都市であり、ドイツ最大の港湾都市です。

また、まちの中心に人工の湖、内アルスター湖と外アルスター湖があります。さまざまな観光船が行きかい、内アルスター湖の周りには市役所やカフェ、ブランドショップなどがたくさんありました。運河沿いには100年以上の歴史を持つ赤レンガ倉庫が建ち並んでいました。また、外アルスター湖（1周7.4キロメートル）にはランニングロードが整備されていて、たくさんの人がジョギングをしており、清潔な水飲み場も設けられていました。

ハンブルク市職員の方がバスの車中で、次のような説明をしてくれました。

- ・市の面積の13%を川、運河及び湖が占めているので、非常に橋（約2,500）が多い。
- ・ハンブルク大学は7万人の学生がいて、ドイツでも有数の大学である。
- ・ハンブルク市街は、昔は城壁で囲まれていた。城壁の跡は今、線路になっている。
- ・市役所の裏側の建物には、証券取引所と商業会議所があり、まさに政治と経済が一体化している。
- ・市役所の建物は112年経っているが、外壁を塗り替えたので美しくなっている。ドイツの他の都市には城があるが、ハンブルクにはないので、市役所が城の代わりに観光名所になっている。
- ・市役所前の広場は11月の終わりになるとクリスマスの市（いち）が立つ。その時期になると露天商がずらっと広場を埋め、ライトアップもされる。
- ・土産品としておもしろいのは、左右の肩に水をぶらさげている人形（フンメル像）で、19世紀のころは水道がなく、飲み水を運んで各家庭に販売していた格好をしたものである。ハンブルクのシンボル、マスコットになっている人形で、これが今回大阪市に贈られる。
- ・ハーフェンシティ（港湾都市）は2025年完成予定で、現在は第1期工事の一部が施工されている状況である。



- ・ハンブルク港（エルベ川にある）は、ヨーロッパではロッテルダム港に次いで2番目に大きい港であるが、昨年のリーマンショック以来、大変な状況にある。
- ・ハンブルク港のランドンブルッケ（接岸ブリッジ）は観光名所となっている。今は、商船は接岸していない。係留されている帆船は、博物館として利用されていてレストランもある。

ハーフェンシティ H2Oビル

ハンブルク市が来年の上海万博のベストシティ実践区に出展する「ハンブルク・ハウス」のモデルとなったH2Oビルの視察のため、ハーフェンシティを訪れました。

ハーフェンシティ計画は、ヨーロッパ最大の都市再建プロジェクトの一つであり、歴史的倉庫群を再開発するとともに、市街地面積をエルベ川よりも40%拡大して、その155ヘクタールの敷地に約550棟の住宅を建設し、4万人の雇用を創出しようとする壮大なプロジェクトで、2025年完成予定です。新たな設

計と改造により旧市街を、エコ建築を大量に有する大型商業・住宅地域に変身させています。

ここでは、建築家のイングリット・スペングラー氏に案内していただき、次のような説明を受けました。

- H2O ビルの並びのビルはすべて運河側の 1 階部分が大きく引っ込んでいるが、これは、洪水時にはそこまで水面が達することが予測されるからである。
- ハンブルクでは 2011 年に緑の首都と言われるまちをめざしているので、エネルギー効率の高い建物を建てるのが中心テーマになっている。また、建物の用途が一つだけに偏らずに、居住空間、商業空間、工業空間がバランスよく混ざることに力を入れている。もう一つ大切なことは、建築物としてのクオリティが高いことで、建築のコンペティションを行っている。
- H2O ビルは、ガラス張りでない部分（上層部）が居住空間で、ガラス張りの部分（下層部）がオフィスになっている。住居が 25 軒分で、オフィスが 4 フロア分ある。すべての住居から水辺が見えるように設計していて、それが住居部分のセールスポイントである。住居はすべて分譲で、価格は当初 30～40 万ユーロ（約 4～5 千万円台）だったが、最近は人気があるので 2 割ほど上がっている。小さい住居が 70～80 平米で、大きいのはメゾネットタイプで 150 平米くらいである。2005 年に完成したが、断熱効率が非常に高く、熱交換システムがありエネルギー効率がよい。最近完成した建物は、さらに効率がよくなっている。
- エネルギー効率が非常にいいことと、建築様式が典型的なハンブルク式（上層部のレンガの梁）であるので「ハンブルク・ハウス」と呼ばれ、上海万博に出展することになった。ハンブルク・ハウスは、H2O ビルの外観とは大分違う。上海はハンブルクに比べて気温が高いことから違う設計をしており、30 メートル地下の地熱を利用し、屋根にはソーラーパネルを取り付ける。設計はすべて私が行った。
- 上海は暑く湿気が高いので暖房より冷房・除湿にエネルギーを使う。エネルギー効率が非常にいいので、使用電力は年間 50 キロワットである（一般のオフィスビルの 4 分の 1）。
- このあたりの土地は、市が民間に売却した。



H2O ビル



この後、近くのビルを視察しました。下層部に幼稚園と小学校、上層部に 30 軒の賃貸マンション（約 90 平米、17～18 万円）がありました。このあたりの人口の増加に伴い公立の小学校が必要となったため建てられました。ビルになったのは、ハーフェンシティでは地価が非常に高いためです。このビルは、ハーフェンシティの建物の中で金メダルを受賞したそうです。受賞理由は、熱効率がいいこと、ガスが発生しない素材を使用していたことでした。また、屋上から商業地域が見えましたが、一遍

にすべてを建てないで、需要を見ながら順次建設を進めるとのことでした。

オッテンゼン・平野地区交流対話シンポジウム

アルトナ区オッテンゼン地区と平野（平野郷）は、双方ともに自治都市の歴史があり、民間レベルでの交流が行われている。友好都市提携 20 周年を記念してオッテンゼンの市民グループ「イースト・ウエスト・ビジョン協会」によってシンポジウムが開催されるので、私たちも参加しました。会場に入る前に、合気道の 4 つの道場が合同練習している様子を見せていただきました。

【宮崎ハンブルク大学日本語学科講師】

遠い日本から来られた大阪の皆さんを歓迎する。この市民交流・対話は、18 年前に東京の向島で始まった。10 年前、大阪とハンブルクの姉妹都市提携 10 周年のときに平野の方と交流を始めた。今回は平野から刀剣砥ぎ師の真津さん（かたなの博物館館長）に来ていただく予定だった。しかし、残念ながら来られなくなったので、刀剣砥ぎのワークショップは 1~2 カ月後にしたい。



刀を持つ宮崎氏

【ブリギッテ・クラウゼ イースト・ウエスト・ビジョン協会代表のあいさつ】

私たちの市民交流活動の趣旨を簡単に言うと、いかにして豊かな生活をしていけるかということ念頭に、東京・向島、大阪・平野の人たちと交流していく中で、お互いに幸せになれるように考えていく活動である。オッテンゼンは小さな路地がたくさんあるまちであり、その中で住民が、古いまち並みをモダンな現代の社会にいかにもく結び付けて住みやすいまちをつかっていけるか、そういうことを考えて市民の活動が始まった。これは、平野に行けばよく似た構造があり、平野にも昔の小さな通りがまだに残っていて、そこの古い伝統をいかにして近代のモダンな社会に結び付けていくか、そういうことを考えている人たちがいた。私たちと同じような物の考え方をしているということで、お互いの経験を生かして交流をしよう、お互いに学び合おうということになった。

オッテンゼンには非常に小さな町工場がたくさんあり、それが徐々に廃止されていったので、それらの工場をいかに再活性化していくかというところから—例えばオッテンゼン資料館はもともと針金や釘をつくらっていた工場であった。また、モッテというコミュニケーションセンターがあるが、ここもたくさんの町工場が入っていたところである。今居るこの場所も石鹸・洗剤をつくらっていた工場、壊さずに再利用している。オッテンゼンには再利用されている工場がたくさんある。先ほどの合気道の道場も工場跡である。



そして平野は、古いまち並みが残っており、特にいわゆる博物館運動ということで、百年、二百年の家を市民に公開して、古い日本と新しい日本を結び付けようとしている。これは、大阪の方々には説明する必要はないと思うが、私たちにとっては非常に興味深い試みである。

【舟戸議長のあいさつ】

今日はこうして貴重な時間をとっていただき、私どもにごあいさつする機会をいただいたことを、まずもってお礼申し上げます。

私たち代表団は、大阪市とハンブルク市の友好都市提携 20 周年の記念事業として、昨夜ハンブルクに到着し、27 日までの日程でさまざまな行事や各種施設の視察を予定している。オッテンゼン地区は本市の平野地区とともにまちづくりシンポジウムを開催するなど、友好都市ハンブルクにおいても特に本市とのかかわりが強い地区であると同っている。私はいつも平野区というと八尾の手前だと思っただけであるが、今ちょっと宮崎先生の話をお聞きしただけで、アッなるほどと、どことなくオッテンゼンと平野のまちは似ているという気持ちが湧いてきた。オッテンゼン地区と平野区の交流を通じて、ハンブルク市と大阪市の絆がより一層強まっていくことを期待する。

続いて、北山副市長、在ハンブルク日本国総領事館の成宮総領事があいさつをされました。

次に、大阪生まれで滋賀育ち、15 年前からハンブルク在住の作家、辻みゆきさんの朗読がありました。その内容は、7 歳のときに大阪の口縄坂で遊んだ思い出を綴った一章でした。その後、地元の方による笙（しょう）とソプラノサクソの演奏があり、会場をあとにしました。

大阪市、大阪市民会、大阪・ハンブルク友好都市協会共催レセプション

今夕ハンブルクに到着した大阪市民代表団 16 名とともに、市民代表団の宿泊先であるマリティム・ライヒスホーフホテルの地下 1 階において、大阪・ハンブルク友好都市協会との共催で 20 周年記念レセプションを開催しました。

【舟戸議長のあいさつ】

今回は大阪市民会から各会派を代表して、それぞれの所属・政党のナンバー1 がこのハンブルクを訪問している。本日は芳賀団長をはじめ、成宮総領事、ハンブルク市の日本人会の湯地理事、またハンブルク市の皆様のおかげで、このような盛大なパーティーが開催できたことを、まずもってお礼申し上げます。

ハンブルク市と大阪市のこの 20 年の歴史においてはいろいろな経過があったが、その中でこれから、もっともっと大阪市とハンブルク市が仲良く、そして人・もの・情報、文化、芸術とさまざまな交流を深めていき、お互いのまちをつくり上げたいと思っている。



私はドイツには何度か来たことがあるが、ハンブルク市には初めて来た。地球上に、このような素晴らしいまちがあることに驚いた。すぐ前に湖があり、川があり、自然があり、そして歴史のある建物が——市役所もそうであるが、いろいろと世界遺産になるような建物がたくさんある。その中に大勢の人が住んでいるというのが、日本人の私にとっては初めて経験することで戸惑っている。「次に生まれかわったらどこに住みたい」と聞かれば、二つ返事でハンブルクと申し上げます。ここにお集まりの皆様方

の今後ますますのご繁栄と、両市の素晴らしい未来を祈念し、お祝いとお礼の言葉とする。

【北山副市長のあいさつ】

今日は土曜日にもかかわらず、このようにたくさんの方々にお集まりいただき、本当にありがとうございます。今年でハンブルク市と大阪市は友好都市提携 20 周年を迎えたわけであり、この間、多くの方々の力に支えられ、さまざまな分野での友好関係が築かれてきたと思う。これは大阪市とハンブルク市との関係だけではなく、日本とドイツとの友好関係にも大きく貢献してきたと考えている。今回は、私たち大阪市と市会代表団の訪問、そして初めて大阪市民の代表団と一緒にハンブルクを訪れることとなった。

昨日の夜に到着し、今朝から市内のいろんなところに行き、あるいは行事に参加した。ハンブルクの感想を一言で言うと、本当に美しいまちであると同時に活気がある。建物やまち並みの色合いが白とか砂岩の色とかレンガとかで、非常に落ち着いたすっきりしたデザインである。それに緑が非常に豊かであり、湖、河川とか港の水辺が非常に優れた景観をつくっている。市庁舎前の広場とか、港のあたり一帯に観光客が随分たくさん来られていて、非常に活気を呈している。ハーフェンシティも見させていただき、古いまち並みのハンブルクと新しいまちハンブルク、あるいは商業・業務の中心地でありながら観光の面でも非常に中心地であると、そういう両面を見ることができた。まだ明日、明後日といろいろ見させていただき、大阪のまちづくりにぜひ生かしていきたいと考えている。

今回の 20 周年事業のためにいろいろとお骨折りいただいた皆様方にお礼申し上げるとともに、この 20 周年を契機に大阪とハンブルクの友好関係がますます発展することを心から念願する。

この後、大阪市側の出席者並びに成宮総領事、芳賀市民交流団団長、橘宋雅裏千家茶道教授を紹介しました。

次に、ハンブルク市を代表して文化・スポーツ・メディア省のマリア・クリス・トレ芸術文化交流部長からあいさつがありました。

【ハンブルク市 トレ部長のあいさつ】

今夜はこのような素晴らしい席にお招きいただき、本当に嬉しい限りです。

自由ハンザ都市の代表として、大阪・ハンブルク友好都市提携 20 周年記念レセプションにお招きいただいたことを心よりお礼申し上げます。今年はレーダー議長とゲダシュコ経済労働大臣が大阪を訪問させていただいた。2 人とも大阪で快い歓待を受けて非常に感激していた。私自身は大阪に 2 度行き、平野区も 2 度訪問している。

本日、皆様方にはオッテンゼンに足を運んでいただいて、オッテンゼンで 20 年以上、大阪・ハンブルク友好都市ということを旗印に、市民レベルで交流を続けている現場の人たちに会っていただいたが、それは非常に大切なことだと私は考えている。

先ほどのあいさつにもあったように、大阪とハンブルクにこれだけ共通点があるのだなと実感した。特に、大阪のウォーターフロントと湾岸開発において素晴らしいプロジェクトが計画されており、これらが成功裏に終わることを祈っている。

上海万博には、大阪市も出展されると思うが、我々も「ハンブルク・ハウス」を出展する予定であり、



本日それをご覧いただいたと思う。月曜日にはヴェルグ大臣が出席して、図書館で本の贈呈式が、また大阪アレーの除幕式も行われ、ますます両市の友好関係が深まっていくものと思う。今回来られた代表团、個人的にもお顔を拝見すると何人かはお会いした方がおられる。またゲストではないが、工樂ハンブルク名誉代表には非常にご尽力いただいております、この場をおかりしてお礼申し上げます。

今回は天気が残念というか、季節的に遅かったのでちょっと寒いかもしいないが、天気が何とかもってくれて、皆様の滞在が爽り大きいものになることを祈るとともに、これから 25 年、30 年と友好関係が続いていくことを希望する。

この後、工樂ハンブルク名誉代表から「せっかくの機会なので、ハンブルク市と大阪市の関係について少し話したい。大阪市では水都、水の都大阪というフェスティバルが、つい 2 週間前に終わったところである。偶然にも今ハンブルクでは、水都ハンブルクの行事が推進されている。両市が水というものを最近の環境問題も含めて大きなテーマの一つとされているのは、我々市民にとっても非常に興味深いところである。こういう中で一つ申し上げたい。ハンブルクの絵葉書を探してみると、昔はきれいなアルスター湖、湖のほとり、湖を背景に緑の木々が茂っている風景、あるいはラタハス（市庁舎）を中心とする古い建物が普通の絵葉書であった。今回探していて驚いたのは、今申し上げたモチーフはもちろんであるが、港の風景がたくさん絵葉書になっていることである。港というと大概、荷物を運ぶのでごみごみしているとかが空気が悪いとかそういう雰囲気がある。しかし、皆さんもハーフェンシティをすでにご覧になったと思うが、その港が見違えるような新しい風景になっていることに驚き、さらにそれが絵葉書になって売られていることに驚いた。皆そういうことを考えてはいるが、それが実行されて、しかも絵葉書にまでなっているということは、ハンブルク市のマネジメントの一つの成果ではないかと思う。」とのあいさつがあり、乾杯しました。



会場では、橘宋雅先生とお弟子さんによりお茶が振る舞われ、ハンブルク市の方々や市民交流団の皆さんとも会話が弾み、終始和やかなムードで歓談しました。

10月25日(日)

サント・ペテルブルグ、ハンブルクのどちらもサマータイムが実施されていて、今日の午前 3 時を、午前 2 時に戻すという場面にたまたま遭遇しました。要は 1 時間、睡眠時間がふえるということですが、その分多めに英気を養うことができました。

ミニチュアワンダーランド

朝から、ハンブルク港の倉庫街の一角にある世界最大級の模型（ジオラマ）館を訪れ、ヘイコ・モンデルさんの案内で視察しました。

（説明の概要）

- ・創設者はレストランを経営していた双子の兄弟で、旅行中にたまたま鉄道模型を見て、そういう店を開きたいと思い、ハンブルクで鉄道博物館をつくらうとした。このひらめきがあって、現在のミニチュア

ワンダーランドがある。建物の2～4階が展示スペースで1,300平米あり、ハンブルク港湾公社より賃借している。

- ・従業員は、最初3人で始めて12人ぐらいになり、今では180人になっている。
- ・2001年のオープン時には年間15～20万人の入館者があればと思っていたが、2008年には100万人を超えた。
- ・今日1日で4,000人ぐらいの入館者になる。
- ・予約していないと1時間半ぐらいお客さんを待たせてしまうほどで、行列ができる。
- ・入館料は10ユーロ（約1,300円）で、平均滞在時間は2時間半である。
- ・日本語版のガイドマップも準備している。
- ・ここでは1日24時間を15分間と設定しており、15分間に朝、昼、夜と光景が変わっていく。集中制御で60台のコンピューターを使ってすべてのシステムを管理している。



- ・鉄道だけでなく、誰もが楽しめる構成になるように心がけている。動物園やチョコレート工場、ロープウェイ、コンサート風景などもあり、サッカー場ではサポーターの歌声が流れる。ほとんどの模型を自前で設計し、製作している。
- ・ハンブルク空港の許可を得て空港のジオラマを一部屋使って製作しており、来年の4月に完成予定である。飛行機は、ピアノ線で吊り上げて離着陸するような展示になる。ジオラマは実物の部分と空想の部分がある。空港の専用車両は、充電所へ走って行って充電するようなシステムにしている。
- ・ドイツの各政党の夢を表現した模型がある。ドイツ統一のシーンを再現したものがあり、同じものを市役所にも置いている。
- ・車両は大体800台ぐらいあり、常時200台は動かしている。

中央制御室のモニターに映るトンネルに入る列車の様子などは本物の映像と間違えるぐらい精巧にできしており、また人間が2cmぐらいの身長で数万人分つくられていたりして、非常に見えて楽しい施設であり、ドイツ人の緻密さと勤勉さを証明するスペースでした。

また、こちらの「毎日仕事をしていて楽しい？」との問いかけに、モンデルさんは「自分たちが仕事することによって、お客さんは楽しそうな顔になる。楽しそうなお客さんばかり見ながら仕事ができることは、すごく幸せなことだと思う。」と答えられたのが印象的でした。

ハンブルク美術工芸博物館

美術工芸博物館では、東アジア・イスラム部門のノラ・フォン・アヘンバッハ主任に案内していただき

ました。

(説明の概要)

この博物館は 1877 年にできた。創始者のユストゥス・ブリンクマン氏は、日本について非常に関心の高い人でした。1900 年まではドイツで最大の日本関係のコレクションを有していた。しかし、20 世紀になるとベルリンとかケルンのほうがここを超えるようなコレクションを持つようになった。ブリンクマン氏は、日本の美をドイツの地で発見した人であったと言える。日本の彫刻や焼き物、漆器、それに加えて刀の鍔(つば)が特にたくさんある。ここにしかない特別なものは籠(かご)のコレクションである。

特別展「籠師—日本の巨匠(竹芸)」では 100 点の籠を展示しており、そのうち 50 点は初代・早川尚古斎(1815—1897 年)の作品である。自分の籠作品に自分の刻印を入れた最初の職人であり、大阪ミナミ付近の武士の家に生まれたが、手工芸に関心が高かった。

いわゆるお茶会だけでなく、煎茶のお茶会にも使われる籠である。中国から日本に禅宗の僧侶によって煎茶の作法が伝わったので、煎茶の茶の湯というのは中国製の籠を使用した。非常に細い竹で細かい模様をつくるのが中国様式であり、左右対称になっている。もちろん日本が独自に開発したスタイルのものもある。まったく違う美学が根底にある日本の荒編みは自然に近い姿を強調した日本の様式であり、太い竹を割



って細くして使うのではなく、細い竹をそのまま使うことから自然な感じになっている。中国様式と違い、左右対象ではない。明治時代というのは西洋化が急速に進んだ時代であったが、一方で日本的なものを残そうとする時代でもあった。尚古斎は、国際産業見本市で 2 つの賞をとっている。

次に、上方歌舞伎の役者絵の展示について、東洋美術館のイレーネ・ピーペンブロック研修学芸員が日本語で説明してくれました。

(説明の概要)

これらは大阪絵とも言われ、また上方絵とも言われる。浮世絵の世界では、残念ながらあまり知られていない。なぜかという、非常に数が少ないからである。大阪で木版画が栄えたのは江戸時代の終わりごろの文化・文政時代のわずかな時期だけであり、モチーフもほとんどすべてが歌舞伎役者であった。非常に豪華で華やかなモチーフであり、高度な木版技術が駆使された作品である。非常に見るのが楽しい作品が多く、テーマも現代に似通ったところがあると、私は勉強して感じた。これらの作品は一昨年、寄贈されたコレクションの中に含まれていたものである。



私は、この小さな企画展覧会のタイトルを歌舞伎俳優マニア「スター街道」と名付けた。大阪の歌舞伎は非常ににぎわっていた。歌舞伎のファンは非常に情熱的で、俳優とファンのかかわりが密であった。江戸と違って大阪には 4 つしか歌舞伎座がなくて、非常に小さなサークルになっていた。大阪は江戸時代には貿易の集結地で、日本で一番裕福なまちであり、そこで育

った文化はこの木版画を可能にした。誰が大阪絵を描かせたかという、江戸では出版業者が金儲けのためにしたが、大阪絵の絵師たちは自分の好みで描いていた。多くの絵師は、専門ではなく他の生業で生計を立てながら、歌舞伎への興味から歌舞伎役者を描いていた。役者はそれを宣伝に使った。江戸のほうが繊細な絵で、大阪のほうはこってりで、まさに大阪の香りがする。私は早稲田大学に1年間留学していて、大阪にも短期だが3回ぐらい行ったことがある。

ドイツ文化センター

まず、センターについて、アンドレア・ヤコブ館長から次の説明を受けました。

ここは外国人がドイツ語を学ぶところであり、日本の方も初級者コースから上級まで試験を受けるということで常に日本の学生がいる。日本の大学との提携関係もある。語学を教えることのほか、芸術家を育成することに特に力を入れている。ハンブルクでは、芸術家の育成は大きなテーマになっている。芸術家の育成については、シュミット会長が尽力されている。

【リヒトヴァルク財団 ピーター・シュミット会長のあいさつ】



姉妹都市大阪からようこそいらっしゃった。友好都市というのは、グローバルなネットワークの中では絶対に欠かすことのできない大切なものである。以前は、日本・アジアというと非常にエキゾチックな世界で、政治家が仕事のついでに寄ったぐらいであったが、今日においては、それは政治家だけのものではない。たしかに、まずは政治家が最初のコンタクトをすることになるが、政治家の出会いが何年も続くと市民レベルの交流に発展していく。最初は相手の国の表面だけしか見えなかったものが、だんだんと掘り下げた形で見ることができるようになってくる。私たちリヒトヴァルク財団というのは、近代芸術の振興と近代若手芸術家の育成に力を入れており、私たちの姉妹都市であるまちから若い芸術家をハンブルクへ招聘して作品制作の支援をしている。私は以前から国際協力の関係の仕事をしており、特に姉妹都市関係で中心はサント・ペテルブルクであったが、これからは大阪にも力を入れていくことができると思う。私は個人的に非常に日本に関心があるので、私の希望について日本の総領事と話をしている、4年前には日独友好コンサートという今までにはなかった企画を実現させ、日本とドイツの近代音楽の交流を図った。

リヒトヴァルク財団について話すと、創始者のアルフレッド・リヒトヴァルク氏は初代館長で、芸術だけでなく学術にも非常に興味があつて、本人も有名な学者であった。最近、日本人の研究者がアルフレッド・リヒトヴァルク氏に関する論文を書いて博士号を取得している。ドイツ語で560ページにもなる論文である。氏は、自身も大変好奇心の強い人で、我々も好奇心が強く、特に日本に対する好奇心が強いので、今年は京都と大阪から3人の若者を奨学生として招聘している。その3人の作品を今日見ていただいて、できれば大阪に帰ってから研究していただければと思う。また同時にドイツの3人の若手芸術家が日本人と共同で作品をつくった。その創作芸術も本日見ていただきたい。

お互いの交流関係ができたことで、ハンブルクにある芸術大学の学生が日本へ行くことになった。来年

は別の姉妹都市へ送るが、2011年は日独修好150周年にあたる記念の年になるから日本に送ることになる。2011年のときには政治家の交流だけではなく、芸術なり言語なり、あるいは世界言語である芸術作品を通じて交流をますます深めていきたい。

続いて、北山副市長があいさつをした後、ワールド・ランゲージ・ペインティング展を視察し、会長の話にあった作品を中心に説明を受けながら鑑賞しました。

ハンブルク国際海洋博物館

この博物館（10階建て）は、ハーフェンシティの大阪アレー（大阪通り）横の倉庫街にあり、3千年に及ぶ航海と海洋の歴史を学ぶことができる施設です。シュワンツさんに案内していただきました。

（説明の概要）

- ・2008年6月にオープンした。
- ・博物館のある倉庫は1878年に建てられたもので、ハンブルク港で一番古い。柱や梁はもともとあった材料を、床板は裏返して使用している。3年前にハンブルク市と99年間無償で借りる契約を交わしている。市から補助金はなく、財団法人で運営しており、赤字が出れば理事長が補てんしている。
- ・小さな船（サイズは1,250分の1）だけで4万隻と世界で最も数が多い。ハンブルクの護衛船、世界の歴史的な帆船、戦艦、商船隊、遠洋漁業船から沿岸漁業船などである。



- ・100分の1のサイズで製作した戦艦大和とドイツ軍のビスマルクを並べて展示している。
- ・コレクションは、理事長のペーター・タム氏（81歳）ひとりで60年以上前から蒐集したもので、その費用は大体20～30億円になる。氏は、30年近く新聞社の社主で、昔はドイツの資産家ナンバー1に数回なっている。
- ・氏が6歳のときに風邪をひいた際、母親から初めて船の模型をプレゼントされたのが始まりであり、その船の模型も大切に展示している。
- ・博物館には船をつくる職人（船員OB）が2人いる。1隻製作するのに約2週間かかる。
- ・鯨や牛などの動物の骨でつくられた船がたくさんある。
- ・純金でつくられた世界で一つのサンタマリア号がある。金3キログラム、プラチナ1.5キログラムが使用されており、4,000時間ぐらいの製作期間を要した。理事長の友人の宝石商から寄贈されたものである。

在ハンブルク日本国総領事館

成宮総領事、矢加部領事からハンブルクの情勢等についていろいろとお話を伺いました。その主な内容は次のとおりです。

- ・今のハンブルクの最大の問題は、リーマンショック以降の経済状況である。これは重大な影響をもたらしている。ハンブルクは海運関係でもっているのに、造船会社がどんどん倒産して、最大の造船会社も倒産しつつある。
- ・日本でいう金融庁のようなところがハンブルクのノルト銀行を検査した結果、問題のある債権が1千億ユーロ（約13兆円）あった。この銀行は、不動産部門ではドイツの3大銀行の一つである。国際金融市場に手を出したのが原因で、不良債権にすると2～3兆円になる。金融システムを維持するためには放っておけない。
- ・コンサートホール「エルベフィルハーモニー」の建設費が当初計画の数倍になり、大問題になっている。管理運営費もものすごくかかるらしい。ハンブルク市にはかなりの負担になるだろう。
- ・ドイツでは当初の契約金額から、施工していく間に資材の値上がりなどでどんどん金額が上がっていくのが普通である。
- ・連邦政府と地方との関係は、税金でいうと日本では3割自治とかいう言葉があるが、ドイツは日本より地方の自主財源は多いと思う。しかし、ドイツでも年金、空港建設費、介護保険制度とか、そういう基本的な枠組みは連邦政府が決定する。基本的なもの以外は、各州の自主性を尊重するような制度になっている。
- ・日本の年金、健康保険、介護保険制度などはドイツの制度を参考にしている。ドイツは、日本より大体5年先に実施している。
- ・ドイツ統一から20年たつが、東西の格差はいまだにひどい状況にある。さらに、旧東ドイツの中でも、うまく企業を誘致したりして何とかやっているところとそうでないところで格差が出てきている。
- ・ドイツは第1次大戦後の賠償のことがあり、財政赤字とか財政問題にものすごく敏感である。連邦政府の国債発行残高は年間国家予算のたしか70%程度である。日本は10倍近くになっている。これはドイツの付加価値税が19%に対し、日本の消費税が5%と全然違うことが大きい。約4倍の税収になる。
- ・明日会われるハンブルク市のルーデマン政務次官は、前の法務長官で将来の市長候補である。
- ・EU圏においては、付加価値税は14～25%と差があり、その範囲内で各国において決めることになっており、ドイツは2年前に15から19%に上げているが、まだバリエーションがある。
- ・ハンブルク港は、特に東ヨーロッパ関係のハブ港である。ハンブルクに進出している日本の企業、パナソニック、カシオ、シャープ、ヤマハなどは製品をハンブルク港に運んで来て、それからヨーロッパ各地へ配送することが多い。



- ・ハンブルク港から再配送する場合は、ほとんどが鉄道を使う。トラックやトレーラーはほとんど見られない。ドイツも近隣諸国も国鉄がほとんど民営化されているので、ハンブルク市またはハンブルク港はドイツの鉄道の株式を随分持っている。ポーランド、ロシアの鉄道の株式も持っている。そのため船の到着時刻に合わせて貨物列車のダイヤ編成がされている。今、荷扱い量ではロッテルダム港のほうが上であるが、いずれは変わっていくと感じている。
- ・コンテナヤードは今回の視察ルートには入っていないのでわからないと思うが、本当にすごい規模である。ハンブルク港の近辺に企業が進出する場合、あるいは土地を企業に提供する場合には、ハンブルク港を活用することが条件になっている。
- ・ハンブルクの空港は、国際線は少ないが、ルフトハンザの航空機の整備は全部ハンブルクの会社が行っている。中近東の王族のプライベートジェット機（ジャンボ級）のインテリアもハンブルクのルフトハンザテクニクという会社が行っている。ハンブルクでは航空機産業が発達しているので、ハンブルク工業大学には航空機関係の学部がある。こういうふうにはハンブルクでは、産業や大学が全部つながっている。大阪市立大学でも国立大学と同じでなく、別の見方で考えていく必要があるのではないか。

このほか成宮総領事は、ドイツの政治情勢や日本の空港政策、世界経済の見通しなどについて話され、実に有意義な意見交換ができました。

10月26日(月)

昨日までハンブルクのまち全体が休日だったので、ハンブルクでの公式行事がこの日に集中し、非常にタイトな日程でした。

ハンブルク市立中央図書館と大阪市中央図書館の交流協定調印式、本の贈呈式

友好都市提携 20 周年を記念して、大阪市と自由ハンザ都市ハンブルクとの図書館交流に関する協定の調印式に立ち会いました。協定の内容は、双方の中央図書館が毎年相互に 100 冊程度の図書館を贈呈しようというものです。

ヘラ・シュヴェマー・マーティーセン中央図書館長の出迎えを受け、図書館 1 階の式典会場に案内されました。まず、大阪・ハンブルクアンサンブルのメンバーによる演奏があり、マーティーセン館長から「代表団の皆様、ハンブルク中央図書館にお越しいただき、ありがとうございます。後ろに飾っているたくさんの本をご贈呈いただきありがとうございました。ハンブルク、大阪は長年の友好関係を結んでおり、それぞれの市民が相手の国の本を読んで相互理解を深めることは非常に素晴らしいことである。ハンブルクに住んでいる日本人の市民にとっても、この図書館に来て日本語の本を読めるという機会があることは非常にいいことである。私どもが提供しているサービスの一つとして、本の提供だけでなく、入口で見てもらったようにオンラインで日本の新聞を読めるサービスがある。非常に即時性の高い情報が得られる。今後、図書館関係の交流がますます盛んになり、職員の交流についても今後積極的に行っていきたいと思っている。」旨のあいさつがありました。

【ハンブルク市

カリン・フォン・ヴェルク文化・スポーツ・メディア省長官のあいさつ】

日本のことわざに「読書百遍、義、自ずから見（あらわ）る」というのがあるが、それは日本だけではなく一般的にドイツでも通用することだと思う。非常に相異なる歴史的、文化的背景にもかかわらず、日独両国は多くの面で協力して発展してきた。両国にとって自由民主主義、また文化、教育は国の基盤としての地位を占めている。人間の思考は知識社会の重要な資源である。そして読むという行為は今日つらく、今まで以上に必要不可欠な能力になってきている。コンピューターやインターネットの世界は読むことを不必要な能力にするのではなく、注意深く読む人のみが目覚ましく発展するメディアの分野の可能性をうまく利用できることになった。図書館はこのことに重要な役割を果たしている。図書館の役割は、市民にできるだけ簡単な方法で入手できる限りの情報を提供し、メディアの利用においては専門知識を持って市民をサポートする。今日のグローバル化した社会では自国の言語で書かれた書物だけでなく、世界の知識とアクセスするという課題がある。そのため、図書館分野における国際協力の意義は、ますます重要性を増してくると考えている。

本日の大阪市中央図書館とハンブルク中央図書館との交流協定調印式が行われることを非常に嬉しく思う。この協定によって、ハンブルクと大阪市の友好都市の協力分野がまた一つ広がったと言える。20年来の友好関係の中で両市が港湾都市、商業都市としてだけでなく、メディア、文化、学術の分野での提携が可能であり、さらには芸術や文化面でも活発な交流のメリットが非常に高いことが証明された。



今、日本の文化に対するドイツ人の関心は非常に強いものがある。例えば、日本のマンガはドイツの青少年の間で大変人気がある。メディアを通してお互いに相手国をよく知ることによって、文化面の理解が一層深まると確信している。

ハンブルク中央図書館にはすでに 27 カ国語に及ぶ蔵書があるが、今回の協定を機に「日本セクション」の設置を決定した。来週からすべての市民が、大阪からプレゼントいただいた本を読んだり借りたりすることができるようになる。もちろんハンブルクに住む日本人だけでなく、日本や日本語に興味のあるすべてのハンブルク市民を対象としている。

私はここで、自由ハンザ都市ハンブルクを代表してこの素晴らしいプレゼントのお礼を申し上げたいと思う。できるだけ多くのハンブルク市民がこの素晴らしい機会を利用して、日本が私たちにとってより身近に感じられるようになることを期待している。また逆に大阪市中央図書館でも、ハンブルク中央図書館から贈った書籍を有意義に利用していただけることを願っている。

【舟戸議長のあいさつ】

本日は、カリン・フォン・ヴェルク長官をはじめ皆様方におかれてはご多用中にもかかわらず、私どもをこうしてお迎えいただき、心から感謝申し上げます。

ハンブルク中央図書館と大阪市中央図書館の交流協定調印の場に出席できたことを本当に嬉しく思っている。またここに至るまで、成宮総領事をはじめ日本人会の皆さんにはいろいろと汗を流していただ

き、そのおかげで今日の日が迎えられたと思っている。本当にありがとうございます。今後、毎年 100 冊の図書を交換すると聞いており、これが本当に長く続くことを私たちも願っている。また、この図書館に入ってあの子どもの机を見て私もカルチャーショックを受けた。日本ではあれほどかわいい机はまず無い。このように素晴らしい環境の中で、大阪とハンブルクが両市の図書を交換しあうことで交流を深めていくとともに、両図書館のますますの発展を祈念申し上げる。



子ども用の机

続いて、北山副市長があいさつをしました。その後、調印式が行われ、ヴェルク長官と北山副市長がそれぞれ協定書に署名しました。なお、今回の友好都市提携 20 周年を記念して特別に旭屋書店より寄贈された新刊 200 冊も合わせて壇上に飾られていました。

大阪アレー（大阪通り）除幕式、渡り初め

友好都市提携 20 周年を記念してハーフェンシティの中の一つの通りが「大阪アレー」と命名され、その道路標識の除幕式と渡り初めを行いました。大阪の市民代表団（16 名）の皆さんは先に来られていました。さらに、大阪市内のヴイストン株式会社のロボット「ALCNON?（アルクノン）」が渡り初めのために、はるばる大阪から駆け付けてくれていました。テレビや新聞の取材もあり、ハンブルクでも注目されているようでした。

【ハーフェンシティ株式会社

ユルゲン・ブルンス・ベルンテルグ最高経営責任者のあいさつ】

今、私は大阪アレーに立っている。ハーフェンシティはヨーロッパで一番大きいプロジェクトである。ここから南のほうへ行くとエルベ川になり、そこに 5～6 年後には世界的に有名な建築家であるレム・コールハース氏の手になるハンブルク科学センターが完成する。大阪アレーはハンブルク市庁舎からエルベ川方面への幹線道路である。南の方は商業地区であり、マンションもこれから建てていくので、これらが 2 年後に完成すると 1 日に 4～5 万人が大阪アレーを歩きかうことになる。そのほか近くには海洋博物館やデザインセンターがあり、2 カ月後にはハンブルクデザイン大学が完成する予定である。また、道路の両側にたくさんの木々（アレーはドイツ語で並木道の意）を植え、大阪の名前にふさわしいようになる。来年 10 月には周りの建物もでき上がるので、大阪アレーが完成する。

【カリン・フォン・ヴェルク文化・スポーツ・メディア省長官のあいさつ】

今日の午前中は図書館、その後この大阪アレーの命名式に出席できたことをとても嬉しく思っている。日本には「旅は道連れ、世は情け」ということわざがあり、これはハンブルクと大阪の友好関係と、本日の大阪アレー命名の意義を非常によく反映していると思う。というのは、ハーフェンシティの大阪

アレーは自由ハンザ都市ハンブルクと大阪市の長い友好関係のシンボルだからである。友好都市提携後、今年で 20 周年になる。このシンボルである大阪アレーの設置を大阪市会議長、副市長、それから大阪市民の代表団の皆様とお祝いできることを大変嬉しく思う。今から 20 年前、当時のヘニング・フォン・シェラウ第一市長と西尾正也市長との間で友好都市提携が結ばれ、それによって両市の協力関係は深まり、友好関係が公のものとなった。

今後はこれまで培ってきた友好関係の継続と両市のさらなる活発な交流を祈るとともに、長い 20 年の道のりが穏やかな散歩道であったと感じられるような関係をつくり上げていきたいと思っている。

【舟戸議長のあいさつ】

本日は大阪アレーの除幕式に大勢の皆さんにご参加いただき、心から感謝申し上げます。

ここに至るまでには、カリン・フォン・ヴェルク長官、ベルンテルグ CEO、また芳賀団長をはじめとする市民代表団の皆さん、成宮総領事、本当にご協力いただき、ありがとうございます。大阪アレーという名称を聞くだけで私は、大阪人としてこれほど嬉しいことはない。

昨日行ったショッピング街、店はほとんど休みだったが、人通りは多く、大阪アレーもそうなると思う。日本では考えられないが、市役所の周辺で、セグウェイに乗って横切ったり、ジャンピングシューズのようなものはいてピョンピョン飛んだりしている若い人たちを見た。このような人たちを来年この大阪アレーで見ることができのを楽しみにしている。これはオフレコかもしれないが、副市長とこのお返しに大阪でも「ハンブルク・アベニュー」をどこかにつくらないといけないのではないかと、このような気持ちになるほど、本当に大阪アレーのことを嬉しく思っている。また、今日は大阪からロボット君が来てくれているので、ロボット君と一緒に渡り初めをしたいと思う。

こういったことをきっかけに両市がますます友好を深め、発展することを祈念する。

この後、ヴェルク長官、ベルンテルグ CEO、舟戸議長、北山副市長の 4 名が、市民代表団が見守る中、大阪アレー標識の除幕式を行いました。そして「ALCNON？」君が大阪アレーを見事に二足歩行して、右手を上げたりするパフォーマンスも見せてくれました。



あいさつする舟戸議長、中央はベルンテルグ氏



ハンブルク市表敬訪問

ハンブルク市庁舎は1897年に完成し、尖塔の高さが112メートルもあるドイツの歴史を代表する建物の一つであり、ネオ・ルネッサンス建築の壮麗な建物である。ハンブルク市政府及び市議会の議事堂として現在も使用されており、市のランドマークの一つとなっている。

【カースティン・ルートヴィッヒ・ルーデマン政務次官のあいさつ】

自由ハンザ都市ハンブルクを代表して、皆様に心より歓迎のあいさつを申し上げたいと思う。今日は市役所によるこそお出でくださいました。十分なことができたかどうかわからないが、実り多き時を過ごされたことと思う。20周年という記念のときに、このような素晴らしい代表団をハンブルクにお迎えできることを本当に嬉しく思う。今年は20周年ということでたくさんの記念行事が行われている。例えば、大阪とハンブルクで芸術の展示会があったり、あるいは毎年これは行っているが、日本の桜祭りとフィナーレの花火大会と非常に日本に集中した形になっている。



市庁舎に掲揚された日本国旗

今はちょうど政治的に大変忙しいタイトな時期にあり、特に経済が去年から厳しい状況になっており、明日、明後日と予算編成を行う。そのため準備として、本日、市長は各大臣との個別折衝を行っているので、残念ながら皆さんをお迎えすることができなかつた。



ドイツでもちょうど連邦議会選挙が終わったところで、今までと違う形の連立政権ができた。その話し合いが先週の金曜日まで続き、土曜日にやっと決定したという状態である。新しい連立政権が誕生したことによって、各州に対する財

政援助なり補助金はどうなっていくか、非常に緊張した場面が続いている。今政治的にはどの部分をカットするかという、できれば話したくないようなことばかりの話し合いが続いており、そういう中で皆さんをお迎えするという大変楽しい課題を与えられたことを、私自身は非常に嬉しく思っている。

皆さんも夏場に来ていただければ、青い空とそれが映える美しいハンブルクのまち並みをご覧いただけるが、今はちょっと天気が悪く寒い。そのあたりは残念である。

【北山副市長のあいさつ】

本来なら平松市長がここに出席することを楽しみにしていたが、どうしても公務のため出席することができなくなり、申し訳なく思っている。お忙しい中、ルーデマン政務次官、そして議長にもお越しいただき、本当にありがとうございます。素晴らしい20周年記念行事のプログラムをつくっていただき、昨日からさまざまな人たちとお会いし、文化交流が多岐にわたって進んでいることがよくわかった。先ほどもハーフェンシティのところの道路に大阪アレーと名前をつけていただき、非常に嬉しく思ってい

る。

【舟戸議長のあいさつ】

ルーデマン政務次官、並びにレーダー議長、本当に久しぶりで、前に10月に行きますよと約束して、今日こうしてお会いでき、非常に嬉しく思っている。

我々が大阪でお世話できる以上のことをこちらでしていただき恐縮している。また、湖畔のお城のような迎賓館に泊まらせていただき感激している。それから大阪アレーという名前——これが東京アレーだったらこんなに嬉しくないが、大阪アレー、これには大変感激している。ハンブルクに来ている関西の人や大阪の人はものすごく嬉しいと思う。どうかこれを契機に両市がますます発展し、これまで以上に協力しあうことを願っている。

【ドーラ・ハイエン議員】

私も実際に初めて大阪に行ったが、ホテルの7階の部屋の目の前に高速道路があり、最初驚いて、慣れるまで大変だった。公式プログラム以外に私が案内して、新世界などの下町へ行き、非常に生き生きしたところを見たので、もう一回行きたいと思っている。

【ルーデマン政務次官】

ハンブルク市民にとって日本というと、まず桜祭りで、あと桜祭りの最後の花火大会となる。アルスター湖畔で行われ、市民の半分はそこに集まり、残る一部の人たちはボートを漕いで湖上から花火を見る。それが、日本人会からの素晴らしいプレゼントであることをハンブルク市民はよく知っている。その時期のほうが今のように寒くない。景色も天気もいい。ちょうどアルスター湖を囲むように桜が満開になる。

【ドーラ・ハイエン議員】

日本の議員の方に大阪でお会いして、いろいろ話をした。美術展のオープニングにも大阪で出席した。例えば、ハンブルクには昨日皆さんで行かれた美術工芸博物館がある。多分ヨーロッパ1のアジアの陶器・磁器のコレクションを持っていると思う。文化の面においては、まだまだ交流を深める余地があると思っている。



【北山副市長】

美術工芸博物館で我々も知らないような本当に立派な竹細工の作品が展示され、しかもそれが大事に保管されている。あるいは、大阪の歌舞伎役者の木版画も展示されており、非常に感激した。学芸員の方が日本に留学していて、非常によく勉強されていた。

【ルーデマン政務次官】

残念ながら版画は今用意していないが、ゴールドenブックに署名していただくために、ハンブルクの会社であるモンブランの万年筆を用意した。

この後、別の部屋で、ルーデマン政務次官、レーダー議長、舟戸議長はじめ代表団のメンバーが見守る中、北山副

市長がゴールドブックに署名しました。続いて、ハンブルク市から大阪市に対してフンメル像（水運び人形）が贈られました。

ハンブルク市主催昼食会

名称からして重厚な「皇帝の間」でレセプションは開催されました。両市の代表や記念事業の関係者など約 60 名が出席しました。

【ルーデマン政務次官のスピーチ】

今から 20 数年前の世界は東西に分断されており、当時はグローバル化という言葉を目にするのはほとんどなかった。また、コミュニケーションの速度は遅く、今のように簡単にできるものでもなかった。それでもハンブルク市民は世界に門戸を開き、国や民族や言語などの境界を越えて、世界中の人々と友好関係を育みたいという願いを続けていた。1989 年ハンブルク市は日本の港町、大阪市に対して強い親近感を抱いていた。歴史を少しさかのぼると、海上航路を通じた 2 つの港の交流は 100 年以上続いていた。だから、大阪市と友好関係を結ぶことになったのは、逆にいえばごく自然のことと言えるのかもしれない。経済的な観点から見ても、これが素晴らしいアイデアであったことは明確になっている。本日ここで、両市の友好都市提携 20 周年を祝うことができることを大変嬉しく思っている。また今回は北山副市長並びに舟戸議長がお見えであり、心よりお礼を申し上げます。



1989 年の友好都市提携で謳われた内容は今日ほとんど実現に至っている。両市の友好関係は時代とともに育まれ、交流の場は経済、政治は言うまでもなく、教育、学術、芸術、文化にまで広がっている。今日では、このまちでも博物館や美術館やコンサートホール、それに日本庭園の茶室で日本の文化を実感することができる。ちなみにハンブルクの日本庭園はヨーロッパ最大の日本庭園である。

ハンブルク議会と市政府も定期的に大阪を訪問しており、友好関係のケアを重要視している。本年 6 月にはハンブルク市議会のレーダー議長とゲダシュコ経済労働大臣が大阪を訪問している。大阪とハンブルクに拠点を置くたくさんの教会や福祉団体も経済活動の支援を進めており、お互いに第三国で大きな成果を収めている。エルベ河畔には 100 を超える日本企業が進出しており、そのうち 60 社はドイツもしくはヨーロッパ本社という位置づけになっている。そのおかげでハンブルクでは 6 千人分の雇用が生まれている。500 を超えるハンブルクの企業が日本との取引関係を持っている。そのうちの 35 社は実際に日本に支店を出している。

20 年前に比べるとハンブルクにおける日本のプレゼンスは明らかに大きなものになってきている。日本のプレゼンスは、もはや 5 月だけではない。アルスター湖畔には 100 本を超える桜の木があり、桜祭り、フィナーレの花火大会には大勢の人がそこに集まる。両市の友好関係がさらに深まる、発展することを祈りながら、それをここまで支えてくださった大阪とハンブルクの大勢の方々にお礼を申し上げたいと思う。大阪の代表団の皆様、本当によろしくお越しくださいました。ここに皆様のお越しを歓迎す

る。

続いて、北山副市長があいさつをした後、昼食会が始まりました。皇帝の間でいただく食事は、場の雰囲気格別で感動するところがありました。

フンメル像、大阪アレー標識記念撮影

市役所前広場において、ルーデマン政務次官、レーダー議長、2007-8年の桜のプリンセス、ジモナー・マリーソル・レルヒさんと一緒に、フンメル像及び大阪アレーの標識を囲んで記念撮影をしました。



ハンブルク市議会視察

議長表敬訪問までの時間を利用して、議会構内などを視察しました。ペーターさんに案内していただき、次のような説明を受けました。

- ・市庁舎は1897年に完成した。建築期間が11年で、当時の主な建築家9人が携わった。
- ・地盤がすごく緩く湿地帯であるため、樫の木の杭が地下に4千本埋められている。
- ・1842年に、別の場所にあった昔の市庁舎の建物は焼けてしまった。
- ・市庁舎内には暖炉が12カ所あるが、一度も火を入れたことがない。産業革命とも関係があるが、ドイツの地でハンブルクは最も古くから遠隔暖房を導入した。庁舎の壁とか床の中に暖かい空気を巡らしているため、暖炉の温もりを必要としなかった。
- ・ホールは庁舎内で一番大きい部屋で重要な催しを行う。今日は音楽会の準備をしている。壁面にはハンブルクの歴史が描かれている。ここシャンデリアは1つが1.7トンある。
- ・議会は2週に1回開かれる。



- ・議場はすべて樫の木（オーク）が使われている。
- ・議席は121席ある。議場正面の7席の中央にレーダー議長が座り、議長の右手に第一副議長、その2人を挟んで副議長3名と書記2名が座る。議席から向かって左側が閣僚（セナート）席で、その一番右にオーレ・フォン・ボイスト第一市長が座る。隣に第二市長が座る。バルコニーには元議員の席が用意されている。

ここで、マルコ・ヴィスナー儀典担当課長代理が来られて、議会に関して質問する時間をつくってくれました。

○質問： 市長は議会から選出するのか。どういうルールになっているのか。

○答え： 議会選出である。選挙で選ばれ、1票でも多ければよいが、きわどい場合には任期4年間を十分乗り切れるかどうかを検討して、引き受けるか否かを定めることになる。こちらで特徴的なことは、閣僚は議員ではないということである。議員がセナートになった場合には、議員の資格を放棄しなければならない。

政 党 名		人数
キリスト教民主同盟	CDU	56
社会民主党	SPD	45
緑の党	GAL	12
左派党	DIE LINKE	8

○質問： 政党ごとの議席の割り振りのルールはどういうふうになっているのか。

○答え： 変わったシステムをとっており、行政に対する与党と野党ではなく、ドイツでは伝統的に議長から見て右側に保守党が座ることになっている。国王あるいは皇帝に忠誠を誓うという人たちが保守党に入っているの、そのようになっている。左側には市民系の人たちが座る。国王がいる時代は、市民たちの声は左となっていた。また、一番前の1列は空席である。

○質問： 大阪市会は、真ん中に最大会派で、あとは多数会派順である。

○答え： こちらは、椅子をどけるとか改装するとかができないぐらい古くなっているので、一つの会派でも通路が間にあって分かれてしまう場合もある。



○質問： 委員会室は別にあるのか。

○答え： 庁舎の部屋数はすごく多いが、行政府と分けて使用しているので、議会に許されている部屋数には限りがあり、どの委員会にも1部屋ずつというわけにはいかない。

○質問： 政党の部屋はあるのか。

○答え： 上の階に事務室がある。各党がそれぞれ小さなホールを持っており、議員と会いたいときは、そこに行けば話ができるような部屋がある。

○質問： 市議会議員選挙の投票日は何曜日か。また投票率はどのくらいか。

○答え： 日曜日である。ハンブルクは投票率が高いほうであり、70%ぐらい。やや下がってきており、以前はもっと高かった。前回の選挙では投票率を上げるために、政党がいろいろなイベントを開催した。選挙権は18歳以上であり、18歳で成人になる。ドイツには16歳のところもある。

(説明) 議場を使った催しとして、130人の若者が1週間、模擬議会を行ったことがある。彼らは、何歳から選挙権を持たせるかを議題として、真剣に議論した。15~21歳の若者が集まって議論したが、16歳ぐらいに選挙権を与えることについては、15歳の子だけは賛成したが、ほとんど全員が反対した。

○質問： 被選挙権は何歳からか。

○答え： 選挙権と同様に 18 歳である。緑の党の議員で多分 22 歳の女性がいる。

○質問： 最年長の議員は何歳ぐらいか。

○答え： CDU の女性議員で 70 歳である。

(説明) 市庁舎は全部で 647 室あるが、ドイツの人は通常オフィスでは 1 人か 2 人で仕事をするので、事務局の人たちは独房のような部屋に入っている。市役所に市民が来ても、部屋だらけでどこに行けばいいのかわからないような感じになっている。

ハンブルク市議会表敬訪問

【ベルント・レーダー議長（キリスト教民主同盟）のあいさつ】

市会議長をはじめご一行の皆様、またここでお迎えできることを非常に幸せに思っている。

皆様方はこれまで過酷なスケジュールをこなしてこられたと伺ったが、まだ終わらない。今晚こちらでお食事を召し上がっていただくときはリラックスして、ゆっくりくつろいで味わってもらえればと思う。こちらにおられる各代表を紹介する。

左派党ードーラ・ハイエン議員、

緑の党ーアンドレアス・バルドフスキー議員、

ロルフ・エリングハウゼン議員（CDU、ヨーロッパ議会へ派遣、姉妹都市関係の担当も）、

キリスト教民主同盟ーハンナ・ギーノウ議員、

社会民主党ーオーレ・トーベン・ブッシュヒーター議員。

それでは、ハンブルクの政治情勢について話をしたいと思う。

皆様方の耳にはすでに入っていると思うが、ハンブルク市議会は 121 人の議員で構成されている。ほとんどの議員が副業として議員をしているので、日中はそれぞれの仕事がある。夕方になってから、ここに政治をするために出てくる。CDU が最大勢力で 56 名、緑の党 12 名と連立を組んでおり与党は 68 名である。最大野党は社会民主党で 45 名、そして今任期に新しく加わった左派党がある。



10 名からなるセナートと呼ばれる閣僚会議——行政府があり、メンバーは市議会が選出する。第一市長のオーレ・フォン・ボイスト氏は CDU から出ており、第二市長のクリスト・グリッツ氏は緑の党から出ている。どのような委員会があるか、どのような省庁があるかはお渡ししたパンフレットに書いてあるので説明は省略する。ただいま申し上げたことをもって、歓迎のあいさつとさせていただきます。

【舟戸議長】

本日はこのような時間をとっていただき、ありがとうございます。レーダー議長、久しぶりです。

今日は議会を視察させていただきその歴史の重みを感じた。また、新しいことを考える場である議場も見させていただいた。我々にとっては、夜からの会議は考えられない。また、選挙権・被選挙権が 18 歳からと聞き、日本もこれからそうあるべきかと思っている。20 周年の記念行事の大阪アレー、大阪通

りには、本当に感謝している。そして、中央図書館での調印式、また一番びっくりしたのは最後にいただいた人形（フンメル像）、副市長と相談して、彼が最も生き生きと映える場所を考えて、その場所が決まればレーダー議長にも参加していただいで設置したいと思っている。

行く先々でハンブルクの一般の方々が私ども日本人をあたたかく迎えてくれて、本当に素晴らしいまちであると思っている。大阪市は人情と義理



の塊のようなまちであるので、ぜひ皆さん大阪にぜひ来ていただきたい。先日、ミシュランで大阪には一つ星の店がたくさんあったので、そういうところに案内したいと思っている。こうしてあたたかくおもてなしいただき、大阪でどうお返しをすればいいのか今から頭をひねっているところである。ぜひ大阪に、成宮総領事も一緒に来ていただければありがたいと思っている。いろいろと本当にありがとうございます。

【レーダー議長】

心あたままるお言葉をありがとうございました。もちろん私たちが今度大阪を訪ねるときには総領事も一緒にお連れしたい。私の執務室から毎日、総領事館の日の丸が見えている。このまちで日本の方々がいづもいろんなことをされているのを見聞きし、肌で感じている。ぜひとも同行していただく。

私は何回も日本を訪問しているが、前回は皆様方から非常にあたたかいおもてなしを受け、また、たくさんのおたたかいお言葉をいただいた。本当に至るところで歓迎していただき、心から感謝申し上げます。

この後、ハンブルク側から「友好都市関係を結んでいることは、いろんな問題を打ち明けあって、お互いに助け合いたいということである。サッカーチームのハンブルガーSV がケガ人続出なので、いつも元気な日本人来てほしい。」「今の問題点を話すことよりも、次の世代を担っていく若い人たちが行きかうことが大切だと思う。私たちがこうして会うことも重要であるが、それ以上に、若い人たちが行きかう、交流を深めるということが友好都市の交流として欠かせないことである。若い人たちがもっと交流できることを願っている。」というジョークと意見表明がありました。

ハンブルク市議会主催レセプション

市庁舎の地下にあるレストラン「パーラメント」において、レーダー議長主催の夕食会が開催されました。 Fresco画やヴォールト（蒲鉾型にアーチを描く）天井がある、素晴らしいスペースで 2007 年にリニューアルされたそうです。レーダー議長のほかに、表敬の際の 5 人の議員に加えて、カイ・フェート・ファン・フォーミツェーレ議員（CDU）とカール・シュビンケ議員（SPD）の 2 人が来られました。

メインディッシュを食べ終えたところに、議長のスピーチが始まりました。

【レーダー議長のスピーチ】

私はこれまでに3回皆さんの大阪を訪れた。それは、いずれもハンブルク市議会議長としての訪問であった。その都度、皆さんと楽しい会話ができ、素晴らしい個人的な出会いがあったこともある。また、もちろんあたたかいおもてなしに接し、そして常に大阪の方々は私たちをこのように迎えてくださることを本当に嬉しく思った。私たちは、皆さんをここにお迎えすることは私にとって大きな喜びであり、光栄に思っている。2009年の今年、私たちは友好都市提携からちょうど20年の誕生日を迎えた。皆さんのご訪問は、これまでの両市の関係が素晴らしい、友好に満ちたものであることの証明である。私たちはこんなに遠く離れているが、距離を超えた大きな豊かな絆を持っていることをここで確認する。本日はこのハンブルク市議会によるこそお出でくださいました。市議会の名をもって心より歓迎する。

公的には1989年5月11日に大阪とハンブルクの友好都市提携が締結された。そのときに共同宣言が発表されている。私はその宣言文の一部を引用したいと思う。

国境を越えた相互理解と友好は、人類の永続的な平和と幸福のために極めて重要なものである。自由ハンザ都市ハンブルクと大阪市は、互いに尊敬、平等、互惠の原則に則り、経済、科学、技術、文化その他の分野において多様な協力関係を着実に展開するために、公的かつ正式に友好都市宣言に署名する。



この宣言の目的は、内容を伴うものとして満たされてきた。そして、20年がたちいろいろな企画が成功を収めている。これからも私たちの友好関係は非常にポジティブなものとして発展していくことに、私は疑いを持っていない。

このように深い友好関係を結んでこられたのは、両市の間に友好的な伝統があるからだと思う。両市とも港町として、また商業都市として非常にたくさんの世界的なまちと友好関係を結んできた。そして、経済的に重要な絆として東アジア地域があり、その中でも日本とは特別に固い絆で結ばれている。150年ほど前から日本とハンブルクとは経済的な関係が結ばれており、今日ではドイツは日本にとって、ヨーロッパで最も重要な通商相手といえる。

ハンブルクが有している「日本力」、日本の力というのは、非常にたくさんの公的な、また私的な団体や研究施設、あるいはたくさんの会社や東アジア系の企業がハンブルクに拠点を置いていることにある。また、さまざまな学術研究施設があり、それぞれ非常に良好な関係で共同研究などを進めている。これらは東アジアをパートナーとしている場合が多い。そして、さまざまな団体やグループ、あるいは市民のイニシアチブで作られた団体などが、それぞれの分野でコンタクトしている。1883年にすでにハンブルクには、日本の総領事館があった。私の計算に間違いがなければ126年前から総領事館があったことになる。こうしたすべての施設は、これからの日本人とドイツ人の友好関係に大きな力を与えてくれるものと思う。

ここで忘れてはならないことは、私たちのまちが行っている祭りの一つに市民の心をつかんでいる行事、「日本の桜祭り」がある。そのときには、ハンブルクの夜空を美しい花火が彩る。もし今、私がそのことに言及しなければ、ここにおられるハンブルクの議員からお叱りを受けたのではないかと思う。本当にハンブルク中の人、そしてシュレーズヴィヒ＝ホルシュタイン州とニーダーザクセン州の人たちも素晴らしい花火大会を心待ちにしている。

ハンブルク市と大阪市の間で結ばれている絆は、これからもますます確固たるものになっていくと考えている。皆様方が今回訪問してくださったことは、これからの両市の友好関係にとって太い絆となるでしょう。そして、この 20 年が本当に豊かな関係を結んできた年月であったと同様に、これからも将来にわたって、私たちは皆さんの信頼のおけるパートナーとして存在していきたいと思っている。今夜ここに皆様方をお客様としてお迎えできたことは、私たちにとって大変大きな喜びである。これからのドイツと日本の友好のためにも乾杯したいと思う。乾杯。

【舟戸議長のあいさつ】

レーダー議長をはじめ議会の皆様方におかれては、このような素晴らしい席を設けていただき、ありがとうございます。23日に到着して4日目で、明日、私たちは帰国の途につきます。非常に残念で、名残惜しく思っている。今回の20周年記念事業は本当に意義深いものであったと思う。特に大阪アリー——北山副市長と相談して、皆さんが大阪に来られたときに見ていただけるように、ハンブルクアリーとかハンブルク広場とか、そういうものをつくっていききたいと思っている。そしてその場所に、いただいたフンメル像を飾れば、非常に効果的であると考えている。



このように華やかなおもてなしを受けて、私たちは非常に充実した気分で大阪へ帰ることができる。ぜひ次回は皆様方に大阪へ来ていただきたい。私どもは、一生懸命できる限りの歓迎をさせていただきます。

(議長から大阪市側議員を紹介)

これから私たちはいろんな機会を見つけて、両方の国でスポーツ、若者や子どものこと、その他さまざまな交流を進めていきたいと思っている。レーダー議長をはじめ、議員の皆様のお越しを心よりお待ちしております。



この後、北山副市長が、「水運び人形（フンメル像）は、議長と一緒に、素晴らしい場所、水辺で人が集まるところに必ず設置させていただくので、ぜひ見に来てください。」と一言添えられ、素晴らしい夕食会が終了しました。

10月27日(火)

すべての日程を昨日で終え、お昼前の便でハンブルク空港から帰国の途につきました。